

山内 泰二

小柴さんは私にとって特別の意味を持った先輩です。小柴さんは1953年アメリカのロチェスター大学の大学院に留学され、たった二年でPhDを取得されました。私が1955年に同じ大学に入った時小柴さんは既にシカゴ大学に就職されて居たので「すれ違い」と言う訳ですが、私も小柴さんと同じ指導教官のM.F.Kaplonにつく事になった事から私と小柴さんの関係が始まります。

小柴さんは明らかにKaplon先生の第一のお気に入り弟子で、「Toshiがどうした」とか「Toshiがこうした」とか聞かされた事は数限りなく有ります。Kaplonは特に私を選んで小柴さんの話をした訳でなく、誰彼を選ばず自分のNumber One Studentの自慢話をして居ただけなのですが、私の方は何時も比較されて居るような気がして勝手に僻んで居ました。

小柴さんはノーベル賞受賞以来、大学時代の成績が悪かった事を強調されて居られます。東大時代の事は私にはわかりませんが、ロチェスター大学の大学院で彼が最優等生であった事は保証します。たった二年でPhDを取った事からも明らかです。アメリカの主要大学では如何なる前歴を持って入って来た学生でも、いろいろな試験を全部パスするまで博士号取得の為の研究さえ始められません。

私の方は小柴さんの五年後にPhDを取った訳ですが、その頃から小柴さんを身近な先輩として何時か彼に迫り着こうと目標にして来ました。小柴さんは帰国後も国内でも海外でも華々しく活躍されており私が迫り着こうとしても到底無理なように見えました。1970年代の後半になって私にも少し運が向いて来てウプシロンと言う粒子を発見しました。ウプシロンと言うのはボトム・クォークと反ボトム・クォーク結合状態ですから新しいクォークの存在を確認したと言って良いと思います。

この実験の本当のリーダーはLedermanと言う偉い先生で、彼は他の実験でノーベル賞を貰って居ます。私は16人位の研究チームのNumber Twoだった事と日本人であった事から1983年に仁科記念賞を戴きました。その当時私が一番得意になっていた頃です。小柴さんは当時Kamiokande(カミオカンデ)で陽子崩壊の実験をしておられましたが、崩壊そのものはなかなか見つからず崩壊寿命の下限を得られたに過ぎませんでした。

その頃何処かで小柴さんにお目にかかり懇談した際、「君はボトム・クォークを発見したなんて得意になっているけど、世間はLedermanの下働きしたとしか思わない。何かこれだけは自分の物だと言える物を持たなければ研究者として意味が無い」と言うような事を言われました。私は大先輩に反論する度胸も無く、黙って居ましたが、内心Ledermanの下働きでも発見は発見、崩壊寿命の下限ばかり報告するよりはましだ、と思っていました。

その後、小柴さんはKamiokandeの研究の主題をニュートリノの物理に変えて超新星から来たニュートリノの検出という快挙をなされた訳です。この発見に就いては「運の良い人だ」と言う意見をよく聞きます。正直に言って私も同感ですが、小柴さんの場合、単に運が良いと言うだけでなく、あらゆる状況に備えて運を逃さない努力をされて居た事は確かです。彼の自信と努力は全く敬服に値します。

こんな文章を小柴さんが読まれたら、「泰二の奴、俺と競争しているつもりだったのか。図々しい限りだ。」とお叱りを受けそうです。私としては、正直に全部白状してから改めてお祝いを申し上げたいと思います。

小柴さんノーベル賞受賞、おめでとう御座います。

(フェルミ国立加速器研究所)